『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」に見られる旅の語句

――「旅立つ」「野を分く」「旅の友」など――

廣木一人

1　はじめに

「連歌的表現」と言われることがある。和歌ではあまり見られないにもかかわらず連歌には頻出する表現、もしくは連歌での実例は少なくても和歌におけるものとは違った意識（伝統的歌語ではないなどということ）で使用された表現などをいうのであろう。勿論、この二つは重なることも多い。

早くに二条良基は『連理秘抄』の中で連歌の言葉が和歌と相違することを次のように述べている。

おほかたは、代々勅撰の言葉を出づべからずといへども、新しく仕出だしたらんも、又俗なる詞も、連歌には苦しみあるべからず。[1]

このような連歌的表現の概念を示し、連歌で用いられた特別の表現を、主として「圧縮表現」という点から我々に具体的に提示してくれたのは島津忠夫氏であった。[2]和歌より詩形の短い連歌において言葉を省略する必要のあったことはまず推察できることである。その後、稲田利徳氏は連歌的表現のありようを四つに分類し、

第一に、連歌詞と呼ばれているように、語彙としての詞自体に関するもの、換言すれば、連歌では使用されても、和歌ではほとんどよみこまれない言葉、第二に、ある語彙の連結表現が、いかにも連歌的な表現となっているもの、第三には、上句、下句の接続関係にかかわるもの、第四に、表現内容にかかわるもの、[3]

と述べている。

両氏以外にも連歌における特別な表現に関心を寄せた研究者には、山根清隆[4]・両角倉一[5]・山内洋一郎[6]氏などがいる。ただし、諸氏の論究は主として語彙に関わるもの、また、心敬・宗祇の

作品を中心とするものであった。本稿は連歌的表現の考察の一端として、前引の稲田氏の分類で言えば、「第二」に該当するようなものについて、『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」を手がかりに確認して行こうとするものである。語一語というのでもなく、作品全体の表現というのでもなく、語の幾つかの繋がり（自立語二語程度）で示された言い回しと言えるようなものである。

これによって『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」の表現のすべてが解明されるわけでないことは当然のことである。表現というものは単に単語や語句だけから判断できるものではなく、込められた心情も含めて作品全体から醸し出されるものであろう。連歌の場合には付合という視点もある。しかし、それは作品の鑑賞、評論にゆだねられる事柄だと言えようか。[7] 本稿ではこの点は擱いておきたい。便宜的にということではあるが、この限定が各時代の和歌・連歌などの表現の特徴を数量化して比較するのに有益である、という利点もある。

あえて「羇旅連歌」に限ることにしたのには幾分か理由がある。連歌師にとって旅はその生活と一体のものであり、このことが何かしら連歌の表現に影響を与えているかも知れないという予測があるからである。江藤保定氏は『宗祇の研究』において宗祇の旅の句について次のように述べている。

その古典主義的な類型の句に、何処まで彼自身の体験を読みとり得るかは問題であるにせよ、そこに彼の原体験から放射して来る旅路の歓び悲しみを理解する事は不可能ではない。そこには心境告白的なものさえ見られる。…その旅の細叙や哲理の端的な表白には、従来の文学に見られなかった特色がある。[8]

このような連歌に対して、和歌においては安田徳子氏が次のような指摘をしている。

多くの歌人達にとって、旅は身近なものではなかった。従って、旅歌は特異な場での特殊な詠歌と意識されていたと言えよう。しかし、題詠歌が発達するとともに、他の題詠歌と詠作の場を同じくすることとなり、旅歌の認識は変容せざるを得なくなり、詠歌も変化した。特に羇旅歌においてはそれをかなりはっきり辿ることができるように思う。[9]

勅撰和歌集と比べて『菟玖波集』『新撰菟玖波集』の二つの勅撰連歌集では「羇旅」に収録された作品数が多いという点も気になる。[10] これらのことが今後の問題として念頭にあることを断っておいて、本稿ではとりあえず、『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」に見られる連歌的語句を見ておきたいということである。

勿論、網羅的でないこと、旅に関わる表現に限ることもはじめに断っておく。また、先行する和歌でまったく使われていないものだけに限ってはいない。その代わりに、『新撰菟玖波集』にしか見当たらないものは省いた。つまり、次に挙げる語句は先行する和歌ではあまり見受けられないが、連歌において多く見られ、好まれたものということになる。

2　具体例[11]

A「旅立つ」

①二一二四　名残多くも夜こそ明けぬれ　近衛政家
二一二五　末遠く旅立つ月に花を見て

②二一二八　なほあはれなる老の行末　前大僧正尊応
二一二九　明日知らぬ身にしも遠く旅立ちて

③二一三六　野山を行けば袖ぞ露けき　清超法師
二一三七　時しもあれ憂き秋風に旅立ちて

④二一三八　枯れ野の露に嵐吹く道　忍誓法師
二一三九　虫の音も旅立つ里の名残にて

⑤二一四〇　山風寒し朝霧の空　森正時
二一四一　狩衣裾野の月に旅立ちて

⑥二一五四　旅立ちし故郷人を待つ暮に　宗砌法師
二一五五　山路は雲の帰るをぞ見る

⑦一〇三六　旅立つ袖に落つる山風　祝部友弘
一〇三七　雁の鳴く暁月に霜降りて

⑧一三七六　あとや先にと道急ぐなり　存胤法師
一三七七　後の世は旅立ち残る人もなし

『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」において「旅立つ」の語句は以上のように多く見られるが、集全体ではさらに、

この語句が和歌に使われたのは次の西行の歌が早い。[12]

柴囲ふ庵のうちは旅立ちてすどほる風も止まらざりけり
（山家集・九六五）

以後、

時鳥卯の花陰に旅立ちて語らひ初むる声聞こゆなり（建久六年民部卿家歌合・四八・殷富門院大輔）

昨日までいづくを草の枕にて今朝は旅立つ春にかあるらん（御室五十首・三〇〇・藤原季経）

山風に峰の木の葉は旅立ちぬひとりや住まん岡の辺の庵（老若五十首歌合・二八九・寂蓮）

帰るべき道は心にまかせても旅立つほどはなほあはれなり（建礼門院右京大夫集・二四四）

など、十二世紀前後に続けて見られるものの、その後、室町期になるまでほとんど見られなくなる。[13]勅撰集にもない。

この語句が取り立てて特別な言葉でないにもかかわらず和歌に少ないのは不思議な感じがする。あまりにも直接的過ぎる表現であるからであろうか。歌例において「旅立つ」ものが「時鳥」「春」「木の葉」であったりするのは趣向を凝らさないと使えないと思われていた形跡がある。西行の歌も旅立ったようだというのであって実際に旅立つ行為を詠んだものではない。

それを素直に人の旅立ちに使うのが連歌での使い方で、先の『新撰菟玖波集』の例のほとんどがそのようである。理由はいくつか考えられる。趣向を凝らすほど詩形に余裕がない、連歌

においては日常的な語句が取り込まれた、もしくは百韻の行様において明確な旅の句を多く詠む必要があり、単純とも言える表現を用いたなどということもあったであろう。さらに、連歌師にとって「旅立ち」が実感のある体験であったということも認めるべきかも知れない。

この語句は『新撰菟玖波集』でのみ見られるものではなく、連歌においては頻出し、例を挙げれば枚挙に暇ない。次に挙げるのはその一部である。

⑨　月出でぬれば道ぞ知らるる　　円恵
　さらでだに憂き秋にしも旅立ちて　　周阿
（紫野千句[14]・六・五二／五三）

⑩　時も違へぬ秋の鶏　　日晟
　旅立ちし関のこなたの露分けて　　盛家
（文安月千句[15]・八・八二／八三）

⑪　まだ初雁か長月の空　　頼重
　待ち出づる有明の頃旅立ちて　　龍忠
（文安雪千句[16]・四・四／五）

『竹林抄[17]』にも多い。『新撰菟玖波集』の例と重ならない付合番号だけ示しておく。一〇二、一八八、九四五、九七八、一〇四〇。

B「野を分く」

①二二〇六　行方も知らぬ風はすさまじ
　二二〇七　唐土の虎も住むべき野を分けて　法印行助

旅人は「旅立」ちの後、「野を分」けて旅を続けることになる。この語句は和歌では『隆源口伝』に「古万葉」の歌として、

　我が衣は衣にもあらず高円の野を分けしかば萩の磨れるぞ
（三二一）

が挙げられている他、近世近くになるまで管見に入らない。「分くる野」とした例の方が次の慈円の歌など幾分多く見られる。

　夏草の中を露けみ分くる野は我が故郷の垣根なりけり（六百番歌合・二〇四）

実体験のない歌人にとって、野を分けて旅をする主体は歌に詠みにくかったのであろうか。「分くる野」として、景を詠むことに主眼を置いた方がまだ詠みようがあったのであろう。安田徳子氏は前引した論考の中で、「叙情歌の叙景化」ということを指摘しているが、そのことと関係することなのかも知れない。

連歌においては、『連衆合璧集[18]』の「旅トアラバ」の項に「野を分け衣」の語句が挙げられている。これは前引の『隆源口伝』に載せられていた歌の影響であろうか。近世になると『玉拾集[19]』の「旅」の語の一覧には「野を分る」が挙げられており、この語が連歌において旅の語として一般的に用いられていたことを示している。

『新撰菟玖波集』以外の例を引くと次のようなものがある。

②末遠き尾花隠れの野を分けて　　重貞

旅の心の鶉鳴く声　　真泊
（紫野千句・八・九三／九四）

③　行末暮らす道の中宿　　専順
里よりもこなたなる野を分けやらで　　宗松
（宝徳四年千句[20]・一・九〇／九一）

④　草の枕にあたらよの月　　長敏
まだ知らぬ露に馴れぬる野を分けて　　永祥
（河越千句[21]・七・四／五）

その他枚挙に暇ないが、前引の行助の句以外に『竹林抄』にも二五九、一〇八九番の付合に見られる。

C「行き疲る」

①二二四六　夢より後の更くる夜の空
二二四七　行き疲れ夕惑ひする草枕　　多々良政弘朝臣

旅人は「野を分け」て旅を続け、疲労を感じる。旅人は旅のつらさを痛感するであろう。しかし、「行き疲る」のような実感をそのまま表現する例も和歌では少ない。

玉桙の道行き疲れ稲筵敷きても君を見むよしもがも（二六五一）

は、『人丸集』にも見える『万葉集』歌であるが、『新勅撰集』をはじめ、幾つかの撰集、歌学書に引かれ著名な歌であったと思われる。この歌の影響化で「道行き疲れ」の言い回しをそのまま用いた歌が、藤原定家の

夏の日を道行き疲れ稲筵靡く柳に涼む河風（老若五十首歌合・一六五）

や、藤原信実の二首

いくばくの道行き疲れ休むらん椎の葉狭き旅の乾飯（新撰和歌六帖・二三九九）

我が身よに足も休めず習ひきて道行き疲れ今ぞ悲しき（信実集・二〇四）

などがわずかに見られる。しかし、ここから抜け出すのは、正徹の

行き疲れさてだにあれど夕立の晴るるを待たぬ道の中宿（草根集・二六八二六）

を待たねばならない。連歌においては、

②　舟はいづくぞ旅の夕暮　　盛理
行き疲れあらぬ馬にも乗り換へて　　周阿
（紫野千句・四・四二／四三）

③　ひとりは寝しと夜をや待つらん　　吉理
旅人の踏み見ぬ山に行き疲れ　　賢盛
（宝徳四年千句・六・三四／三五）

④　先立つ人を数ふるぞ憂き　　宗春
行き疲れ暮るる山路に休らひて
（老葉〈吉川本〉[22]・一一二九／一一三〇）

など散見する。感情を直接的に表現した故に、俗語風と認識されたためであろうか。

D「旅のつらさ」

①二三七八　行く行く旅のつらさをぞ知る
二三七九　また越えむ山路の雪に舟泊めて　宗功法師

前項の「行き疲る」と同様、旅行くことの辛苦を直接述べたものである。こちらは「行き疲る」よりさらに和歌での使用例は少なく、中世まででは飛鳥井雅親の

山を越し天にます日を入るかとてふりさけ歩む旅のつらさは（亜槐集・一一四八）

が見られる程度である。『万葉集』歌のような著名が歌がなかったということも影響していようし、このような感情の直接表現は和歌では避けられたためでもあろう。

これに対して連歌では多く用いられた。連歌で多用された「の」を用いての圧縮表現の一つでもあるからかも知れない。数例を挙げておく。

②嘆げかはす旅のつらさやならかまし　心敬
遠き門出の涙落とすな　宗祇
（河越千句・九・七七／七八）

③　旅のつらさもなほ舟の中　心敬
釣り垂るる蓑をば雨に片敷きて
（苔筵[23]・一九一九／一九二〇）

④寝られぬになほ長き夜の程しるく　清玉
旅のつらさに何かしかまし　尭午
（因幡千句[24]・三・九／一〇）

E「旅の友」

①二二一六　思ふ仲をば裂けぬ鳴る神
二二一七　夕立に相宿りせよ旅の友　覚胤法親王

旅人はつらい旅中、「友」を持つことでいくらかは心慰むことであろう。これも「の」を用いての圧縮表現の一つ。和歌では藤原憲経の

契らねど小夜の寝覚めに訪れて時雨ぞ旅の友となりける（嘉応二年住吉社歌合・五八）

が早く、後に、藤原俊成の

山路行く仮の庵を訪ふ嵐なれをぞ頼む旅の友とは[25]（建仁元年十二月石清水社歌合・一七）

の他、

波枕習はぬ旅の友千鳥これや清見が形見なるべき（閑谷集・一三六）
塞き止めぬ涙ばかりや故郷の恋しき旅の友となるらん（実材母集・三二）
故郷を同じ別れの天つ雁鳴きては旅の友となりけり（他阿集・二二三）

などが鎌倉期までの例であるが、これ以後も少ない。しかも、人そのものを友としたものも見えない。この語もある趣向の上でないと用いにくかったのであろう。

連歌においては、

②　先立つあとをよそにこそ問へ

川舟に乗り遅れたる旅の友　　二品法親王

（菟玖波集[26]・一六八六）

③旅の友今朝遠近の霧分けて　　宗砌

また里見ゆる末の山道　　堀川具世

（文安月千句・三・三／四）

④舟渡す遠の里人急ぐらん　　能阿

旅の友呼ぶ明け方の声　　日晟

（文安雪千句・二・二七／二八）

など多く用いられている。『竹林抄』には九五二、九五八、一〇四七番付合の例がある。

また、『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」には、次のような「旅の友舟」の語句も見られる。

⑤二四二〇　交はしも果てぬ言の葉の末

二四二一　灘過ぐる旅の友舟漕ぎ違ひ　　宗砌法師

こちらは和歌においては管見に入らないが、連歌では、

⑥　時雨ぞ空に夕べ催す　　弘阿

苦覆ふ旅の友船漕ぎ並べ　　北畠教具

（初瀬千句[27]・三・一二／一三）

などがあり、『竹林抄』の一〇一一番付合の例もある。

F「旅の暮」

①二一七二　帰るも習ひよしやかこたじ

二一七三　山人の伴ひ捨つる旅の暮　　惟宗氏弘

②二二〇四　いかなる隈に仮庵さしてむ

二二〇五　秋寒き須我の荒野の旅の暮　　権大僧都心敬

③二三五〇　声々交はす人の宿々

二三五一　旅の暮乗る駒いばへ犬吠えて　　宗砌法師

この語句は旅行く途中で日が暮れ、ますますつらい状況が増すことを意味する表現で、圧縮表現と言える。和歌で用いられることは少なく、次の円実の歌で「呉服（くれはとり）」に「暮」を掛けて使われた例が早い例である。

草枕露けき旅のくれはとりあやにくにまた時雨降るなり

（嘉応二年住吉社歌合・八四）

他には、

のどかにて都恋しき旅の暮に山の霞も物思ふ色に（伏見院御集・八二九）

行くままに山の端逃ぐる心地して道遠ざかる旅の暮かな（拾塵集・五一四）

くらいであろうか。

連歌では、

④はじめより思ふ気色はなきものを　　日晟

日を経る旅の暮ぞ悲しき　　圭承

（享徳千句[28]・一〇・一七／一八）

⑤　草引き結び野辺に寝にけり　　中雅

かりそめの宿うち頼む旅の暮　　印孝

（河越千句・五・六六／六七）

⑥　仮の宿りに炊く乾飯　　宗祇
　知る人の涙をこぼす旅の暮　　甚昭
（表佐千句[29]・二・二四／二五）

など頻出する。『竹林抄』にも『新撰菟玖波集』所収のもの以外に、一〇五六番付合に見える。

因みに類似句の「旅の夕暮」は和歌で、

人だにも通はざりける山道に踏み惑はせる旅の夕暮（千穎集・八六）

などと詠まれているのをはじめ「旅の暮」よりは多い。逆に連歌においては「旅の夕暮」の方が幾分少ないようである。「旅の夕暮」も短縮表現と言えるが、詩形の短い連歌においては「旅の夕暮」より「旅の暮」の方が使いやすかったという事情によるのであろう。

G「旅の行末」

①二一一三〇　分くる日ごとに道ぞ変はれる
　二一一三一　まだ慣れぬ旅の行末いかばかり　従一位富子

②二二二〇　心尽くしの旅の行末
　二二二一　宿出でばまたや時雨れむ空の雲　権大僧都心敬

旅の途にあって行末を思い遣る表現である。暮れ方になればますますその不安は募るであろう。この語句の歌例も少ない。中世までに見られるのは、惟明親王の

名残思ふ袂にかねて知られけり別るる旅の行末の露（新古今集・八九二）

や、

歎かじよ一つの塵も身に添はで前の世出でし旅の行末（心敬集・二九〇）

くらいである。連歌においては次の例など多く見られる。

③　我も知らぬは旅の行末
　あひ見るは心ばかりの夢路にて　　藤原親秀
（菟玖波集・八三三）

④　今日出でそむる旅の行末　　宗砌
　三日月の後は幾夜の草枕
（宗砌句集[30]・一六二九／一六三〇）

⑤　都を出でての旅の行末　　圭祐
　返り見るあとの山の端遙かにて　　清玉
（因幡千句・七・四／五）

H「枕借る」

①二一六四　寝覚めにはまたもや聞かむ鐘の声
　二一六五　夕霜払ひ枕借る山　　其阿法師

宿を借りるの意であるが、より具体的なイメージがある。「草」や木の「根」を枕にするという野宿の趣を強く漂わせるものでもあろう。このような則物的なものは連歌のものであるようで、和歌では正徹の「刈生」と掛けたと思われる

枯れゆくを見しも跡なき夢の野に枕かりふの霜の下草（草

根集・五一五三）

の例、次いで

いつも聞く鹿の音ながら枕借る深山の里の有明の空（拾塵集・八五六）

卯の花の色をや袖にしきたへの枕借る夜の岡の松が根（碧玉集・二六八）

枕借る契りよ知らずゆゑもあれや野原の草は心なくとも（雪玉集・二四〇八）

など室町中期になって用いられるようになり、以後、近世に多く詠まれている。

連歌では

② 帰るさいつぞ旅をしか待ち　直清
枕借るこの山間は月もなし　聖阿
（文安月千句・六・一四／一五）

③枕借る岡辺の月や更けぬらん　林阿
一夜明石の舟の梶音　久色
（文安雪千句・五・二一／二二）

④ 清水がもとに枕借る頃
旅ぞ憂き我に伴へ磯千鳥　行助
（行助句集[31]・三八五／三八六）

など散見する。

なお、『竹林抄』にも一〇三一、一〇三三番付合にも見える。これなどは連歌で一般的になった表現が近世和歌に影響を与えた例と言えるのではなかろうか。

I「旅寝の山」

①二一八二　故郷を草葉の露や荒らすらむ
二一八三　旅寝の山の秋の初風　法橋兼載

これも動詞を欠いた「短縮表現」と言えようか。和歌では藤原定家の歌に

思ふどち群れこし春も昔にて旅寝の山に花や散るらむ（拾遺愚草員外・四一一）

とあるのが早い例であるが、その他には、

我もまたともに立ち出でて別るるは旅寝の山の横雲の空（後普光園院百首・八五）

こと問ひて今宵旅寝の山見れば暮れぬ高嶺に雲ぞまづゐる（草根集・一〇一五四）

などあるものの少ない。

連歌でもそれほど多くはないが次のような例が見られる。

②夜の夢枕の下を直路にて　日晟
旅寝の山の峰の松風　重棟
（初瀬千句・九・二三／二四）

③ 月は枕の遠方の空　宗祇
秋寒き旅寝の山の休らひに　宗長
（長享二年正月元日何木両吟百韻[32]・六／七）

④もろともに旅寝の山や別るらん　宗長

泊まり漕ぎ出る船の数見ゆ　宗長
（浅間千句[33]・四・三／四）

因みに『新撰菟玖波集』の発句、

⑤三六四三　花盛り宿を旅寝の山路かな　源政春

は「旅寝の山路」を詠んだ句である。この語句の歌例には頓宗の次の例がある。

踏み分けて越ゆる岩根の苔莚夜は旅寝の山路にぞ敷く（頓阿句題百首・三二四）

J「仮臥の山」

①二三一四　残る夜の月はいづくに霞むらむ
二三一五　夢は都の仮臥の山　太政大臣

この語句は和歌では管見に入らない。「仮臥」の語そのものも多くなく、『六百番陳状』に引かれた『後拾遺集』中の伊勢大輔の歌、

薦枕仮臥にても明かさばや入江の蘆の一夜ばかりも（一五六）

が早い例であろうか。ただし、『後拾遺集』では「かりふしにても」は「かりのたびねに」とある。「仮臥」自体歌語としては一般的ではなく、さらに「山」と結ぶことはほとんどなかったのであろう。それが連歌で用いられたのは短縮表現であると同時に、旅の辛苦をより身近に感じていたからであろうか。

連歌では次のような例がある。

②かひなしや馴れし一夜の浮かれ妻　泰諶
雲の衣を仮臥の山　宗祇
（葉守千句[34]・一〇・六一／六二）

③ひとりひとりの仮臥の山　宗哲
波を床草を枕の夜頃経て　宗祇
（明応八年二月十九日何人百韻[35]・八八／八九）

④一夜片敷く仮臥の山　基佐
都人別れを遠く送り来て
（基佐集[36]・八六一／八六二）

K「船に寝」

①二三七〇　難波のこともただ夢の中
二三七一　こと浦に移るも知らず船に寝て　藤原光傳

この語句は大内政弘の

目も合はで舟に寝る夜の苦の上に雪踏み散らし千鳥鳴くなり（拾塵集・五一一）

の他、中世の例が見当たらない。近世でも少ない。あまりにも直接的過ぎる表現であるからであろうか。山に寝る、船に寝る、という旅では当然あるべきことを表現する語句で、連歌特有に好まれるもののあることは興味深いことである。

連歌では次のように早くから多く用いられている。

②波寒き舟に寝る夜の明石潟　救済
異浦よりも須磨の夕暮　成阿

③　浮かべる月を砕く川波
　舟に寝て千々に物こそ思はるれ　　之好
（紫野千句・九・二一／二二）

④　泊山にも明くるをぞ待つ
　降る雨も荒磯陰の舟に寝て　　日晟
（享徳千句・一・九四／九五）

宗祇
宗祇
（三島千句[37]・九・四六／四七）

L「宿出づ」

①二二二〇　心尽くしの旅の行末
　二二二一　宿出でばまたや時雨れむ空の雲　　権大僧都心敬

②二二六四　流るる水の音の寒けさ
　二二六五　そことなく暁月に宿出でて　　法橋兼載

この語句も何の変哲もないものであるが、かえってそのためであろうか、和歌で用いられることは少なく、『六華集』に載る、

　年経ぬる宿出でししかもとよりもい（ママ）も石も苔青くして（一七三九）

が古い例である。その後、正徹の『草根集』に、

　行末の知らぬ別れも宿出でし袖に重なる峰の横こ雲（一〇一八二）

など四例見られ、実隆などにも次のように詠まれるようになった。

　夕立に暮れぬと思ひし宿出でて行けば山路の日こそ高けれ
（雪玉集・七二九九）

正徹の影響下で連歌また和歌でも用いられるようになった可能性がある。連歌では次のような例などが見られる。ただし、この語句は旅でのこととは限らずに使われるのでその例も含める。

③鴛の影慕ふ月の夜は明けて　　盛卿
　人も旅寝の宿出づる声　　頼連
（文明十八年三月二十七日何船百韻[38]・三／四）

④　日の射す頃も暗き室の戸
　君を思ふ涙の内に宿出でて　　行助
（行助句集・四三九／四四〇）

⑤月暗き暁方に宿出でて　　守武
　仮寝今はた長き夜の空　　守武
（秋津洲千句[39]・追加・一九／二〇）

『新撰菟玖波集』でも「羇旅連歌」以外に、

⑥一六五五　見廻らしけり四方の山々
　一六五六　もの思ひ紛れやすると宿出でて　　法印行助

の例がある。

M「故郷の友」

①二二九四　霞む限りを返り見る山
　二二九五　行く雁は我が故郷の友ならで　　御土御門天皇

これも取り立てて変哲のない語句であるが、和歌では近世の武者小路実陰の歌に、

慕ひきて旅なる夜半の袖までも月ぞ馴れにし故郷の友（芳雲集・四三七四）

が管見に入る程度である。

連歌では次のように早くから用いられている。

② 関まで送る故郷の友
行くは旅とまるは何か憂かるらん　成阿法師
（菟玖波集・一六七〇）

③程経てはなほぞしほるる旅衣
いつきて馴れん故郷の友　正永
（応永三十年五月二十五日山何百韻[40]・五／六）　善基

④月をのみ我が故郷の友なれや
昔の人は長き夜の夢　行助
（行助句集・六三三／六三四）

N「旅の帰るさ」

①二二八六　秋過ぎ方の旅の帰るさ
二二八七　故郷に我待つ月や残るらむ　智蘊法師

旅の帰途を意味する語句であるが、和歌では次の三条西実隆の例が見られる程度である。

夜を重ね変はる宿りも嬉しきは都近づく旅の帰るさ（雪玉集・七六〇四）

連歌ではそれほど多くはないものの散見する。

②飲む酒の酔ひの名残に枕して
心休むる旅の帰るさ　賢林
（文明七年九月二十五日何山百韻[41]・四七／四八）

③ 偽り多き文は恨めし
幾年か旅の帰るさ待たすらん　兼載
（園塵[42]・一六六二）

④例ならぬ身の起き臥しの程を経て
うらぶれ果つる旅の帰るさ　紹巴
（称名院追善千句[43]・十・六九／七〇）　紹巴

因みに類似語の「旅の帰さ」も連歌では僅かに見られるが和歌では見られない。

O「国遠し」

①二三三六　なしと聞きしぞ永らへにける
二三三七　国遠き伝はまことの稀なれや　法橋兼載

この語句は次のように『万葉集』で幾例か用いられた後、和歌でほとんど見られなくなったものである。実感がなかったのであろうか。

我妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも（四四・石上朝臣麻呂）

国遠き道の長手をおほほしく今日や過ぎなむ言問ひもなく（八八八・麻田陽春）

国遠み直には逢はず夢にだに我に見えこそ逢はむ日までに（三一一五六）

国遠み思ひなわびそ風のむた雲の行くごと言は通はむ（三一九二）

連歌では次のような例などがある。

② 吹く音高しあらましき風
国遠き夷の笛を冬聞きて　宗砌
（宗砌句集・七三三／七三四）

③ 小松の里の名ぞ常盤なる
国遠く渡る燕の巣を懸けて　行助
（行助句集・四八一／四八二）

④ 都出でてよ宿りだになし
国遠き旅の行方のいかばかり　宗祇
（明応三年四月十一日薄何百韻[44]・二二／二三）

3 まとめ

以上、『新撰菟玖波集』「羇旅連歌」に見える連歌的だと思える語句をほぼ旅程の順に並べて検証してきた。これらは動詞を省き「の」で前後を繋げてニュアンスの多い圧縮表現とした、などという点を除いては取り立てて工夫を凝らした特別な語句ではない。それにもかかわらず、和歌であまり用いられずに連歌に多く見られるというのはどうしてなのであろうか。先にも述べたように連歌師にとって旅は極めて身近なものであり、和歌とは違った、言ってみればより日常的な語句というものを自然に取り込んだということであろうか。このような日常的な語句、もしくは圧縮表現は「はじめに」で挙げた先学らに既に指摘されているように連歌において一般的であったと言えるのかも知れない。

両角氏は前引の論考の中で『新撰菟玖波集』の自立語を取り上げ勅撰和歌集には見えないものを一覧にして、

分量的には、巻第六・十五・十八の三巻が目につく。

と述べている。しかし、それは自立語に限ってのことであった。数語が連結された語句においては違った結果の出る可能性があろう。その点で旅の句には関心が引かれるのである。はじめに述べたように「表現」という概念は難しい。表現とは語一語から作品全体、さらに付合にまで及ぶものなのであろう。本稿はその検証の一端として試みである。

本稿を執筆するに当たって、特に三者から多大な学恩に与った。記して感謝の意を表したい。一には、『新編国歌大観CD-ROM版Ver.2』である。二には、『新撰菟玖波集』の輪読を主に平成六年九月から活動している「連歌の会」である。三には、勢田勝郭氏の手になる「連歌研究支援用例検索システム『Keiko II—R』[45]」である。本稿での連歌用例の検索は主としてこれを利用させていただいた。具体的な例の引用以外に、多く見られる、などとしたのはこの検索システムで見出されるものである。

注

(1) 日本古典文学大系『連歌論集俳論集』

(2) 「連歌の表現と和歌の表現—湯山三吟を中心として—」(「語文」14、昭和30年3月)

(3) 「室町期の和歌における連歌的表現—連歌師の和歌を中心にして—」(『連歌と中世文芸』角川書店、昭和52年2月)

(4) 『心敬の表現論』(桜楓社、昭和58年5月)

(5) 『宗祇連歌の研究』第四章第四節「『新撰菟玖波集』の語彙と一句の作様—非歌語的語彙を中心に—」(勉誠社、昭和60年7月)

(6) 『連歌語彙の研究　論考及び千句連歌七種総索引』(和泉書院、1995年2月)

(7) 刊行中の「連歌の会」による『新撰菟玖波集全釈』(三弥井書店、平成11年5月〜)では主として「付合」の項で総合的な連歌的表現について考察を加えている。

(8) 風間書房、昭和42年6月。第二章第一節「宗祇の旅と旅の生涯」

(9) 「旅人のいる風景—羇旅歌の変遷をめぐって—」(「名古屋大学文学部研究論集(文学)」34、1988年3月)

(10) 「別離歌」などと名づけられた部の歌も旅に関わるものなので、「羇旅」に入れるべきだろうが、それを含めても連歌集の方が多い。

(11) 『新撰菟玖波集』は『新撰菟玖波集全釈』(三弥井書店、平成11年5月〜)。和歌は『新編国歌大観』、連歌はそれぞれ注記したものによった。百韻連歌などの場合、該当語句を含む句と同時に前句、付句どちらを挙げるかは場合によった。句番号、付合番号どちらを記すかは引用テキストによった。私に振ったものもある。また、漢字などの表記は私に改めている。作者についても実名などに改めているものがある。

(12) 『堤中納言物語』「花桜折る少将」には「そなたへと行きもやられず花桜匂ふ木陰に旅立たれつつ」の歌がある。しかし、『堤中納言物語』の諸本は近世を遡ることができず、現存最古の榊原家本では「旅立たれつつ」の箇所が「たちよられつつ」とあり、こちらの方が正しいと思われる。

(13) 他阿の歌に「旅立てば深山の浦も目に見えて心を澄ます道の遙けさ」(他阿上人集・一二四)がある。題詠ではなく実体験を詠むことが多い他阿の歌の特色を示していると言える。

(14) 古典文庫『千句連歌集一』。以下同じ。

(15) 古典文庫『千句連歌集二』。以下同じ。

(16) 古典文庫『千句連歌集三』。以下同じ。

(17) 新日本文学大系『竹林抄』。以下同じ。

(18) 中世の文学『連歌論集一』(三弥井書店、昭和47年4月)

(19) 深沢真二「(翻刻)連歌寄合書『玉拾集』」(「国文学研究資料館調査研究報告」11、平成2年3月)

(20) 古典文庫『千句連歌集三』。以下同じ。
(21) 古典文庫『千句連歌集五』。以下同じ。
(22) 貴重古典籍叢刊『宗祇句集』
(23) 貴重古典籍叢刊『心敬作品集』
(24) 古典文庫『千句連歌集四』
(25) 『夫木抄』に収録されたものにより一部改める。
(26) 金子金治郎『菟玖波集の研究』(風間書房、昭和40年12月)。以下同じ。
(27) 古典文庫『千句連歌集一』
(28) 古典文庫『千句連歌集三』。以下同じ。
(29) 古典文庫『千句連歌集四』
(30) 貴重古典籍叢刊『七賢時代連歌句集』。以下同じ。
(31) 貴重古典籍叢刊『七賢時代連歌句集』。以下同じ。
(32) 江藤保定「宗祇連歌作品集拾遺」(「鶴見女子大学紀要」9、昭和46年12月)
(33) 連歌集書(マイクロフィルム版「静嘉堂文庫所蔵歌学資料集成」)
(34) 古典文庫『千句連歌集六』
(35) 『宗祇の研究』(前掲)
(36) 「永仙句集」(「続群書類従」36)
(37) 古典文庫『千句連歌集五』
(38) 『宗祇の研究』(前掲)
(39) 『荒木田守武集』(神宮文庫、平成11年8月〈増補改訂版〉)
(40) 図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』(養徳社、昭和40年7月)
(41) 江藤保定「宗祇連歌作品拾遺」(前掲)
(42) 「続群書類従」17下
(43) 金子金治郎『連歌古注釈の研究』(角川書店、昭和49年3月)
(44) 『宗祇の研究』(前掲)。日時は正しくは文明十二年五月下旬か。両角倉一『宗祇の研究』(前掲)第二章第三節注参照。
(45) 「文学」3―5(2002年9・10月)誌上に勢田氏自身による紹介がある。

(ひろき・かずひと/本学教授)